第11回 京都建築賞 結果発表

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。

主　催　一般社団法人 京都府建築士会
後　援　京都府・京都市・宇治市

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏による「建築」揮毫

優秀賞

西陣の立体町家

設計者　小林広英・伊庭千恵美（京都大学）
　　鳥居厚志（㈱アトリエ九間 一級建築士事務所）
　　桝田洋子（有桃李舎）

京都御苑の三つの休憩施設

設計者　香山壽夫・下川太一・鈴木隆史・梅野　勇（香山建築研究所）

2／5

設計者　柳室　純（一級建築士事務所 柳室純構造設計）
　　奥谷みわ子（㈱奥谷繁礼建築研究所）
　　服部さおり・服部大祐（Schenk Hattori）
　　甲斐貴大（Studio arche）

奨励賞

Row House in Nishinotoin

設計者　服部大祐・服部さおり（Schenk Hattori）　甲斐貴大（Studio arche）
　　柳室　純（一級建築士事務所 柳室純構造設計）

［審査委員会］　委員長　竹山　聖（㈱設計組織アモルフ）
　　委　員　井上章一（国際日本文化研究センター 所長）
　　永山祐子（有永山祐子建築設計）

古代象形絵文字作家　竹本大亀（たけもとだいき）氏　プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫（きごう）活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

2023年 京都建築賞 審査総評

審査委員長　竹山　聖

『建築文化』誌1979年1月号に発表された'78建築文化懸賞論文入選発表において最上位の選外佳作に選ばれたのが、審査員の一人井上章一氏の「呪われた住宅設計」だった。ちなみに入選作はなし、つまり最上位である選外佳作だ。当時23歳、俊英のデビューである。

半世紀近くも前のこのような受賞に触れるのは、今回の審査選考課程を経てあらためて、ユーモアや揶揄も含め、その批評眼に学ぶところが大きいと思うからである。

「呪われた」というのはジョルジュ・バタイユの「呪われた部分」(＝蕩尽)をふまえての命名だ。それは古来、人類文化の根源をなしてきた。これを当時の建築ジャーナリズムなどを通した建築家の成り上がり方を概観しながら、生活に必要な機能でなく、剰余の部分、無駄な部分、あるいはそれによって己が権力や財力や生活余力を示す部分を提示することが施主や設計者にとっての住宅設計の「キモ」であることを喝破し、そこに成金的と貴族的の区別をする。成金的とはこれ見よがしな蕩尽であり、貴族的とは内に秘めた蕩尽である。成金的はその言葉のまま、「贅沢で浪費的な普請を見せびらかして客を接待する」住宅のこと。一方の貴族的の例として氏は「外観は貧相の一言につきる」京町家を挙げている。外からすぐわかるような成金的なはしたなさでなく、中に入って初めてそれと知られる豊かさ。「なにやら、やたらと京都を持ち上げてきたようだが」と自嘲をこめつつ、これを京都的、と評しながら。

今回の応募案は、住宅が多かった。あるいは住宅スケールのものが多かった。しかも改修が多かった。そうした中で町家、正確に言えば長屋の改修である二つの応募案が優秀賞と奨励賞に選ばれた。設計者チームのメンバーもほぼ重なっている。ともに小さな空間に、しかも贅を凝らすことなく、むしろ仕上げをすべて削ぎ落として裸の空間に、言ってみればほとんど下地素材そのままに還元して、その中に豊かさを込めるという工夫を見せている。仕上げといっても、ただ奥行き深い暗がりに天窓からの光が怪しく差し込むように銀色に塗りこめるだけ、といったように。あるいは路地との境にポリカーボネートの薄い半透明な可動の仕切りを施すだけ、といったように。

にもかかわらず、これらはまさしくバタイユ的な「呪われ」方をふんぷんと醸している。すなわちエロティシズムの位相にすら達している。かつての井上氏が喝破した成金も貴族も突き抜けた位相に、今や住宅設計が到達したことを暗示もしている。「呪われた住宅設計」は60年代高度成長期、70年から85年の「解体と批評の季節」、そしてバブルとその崩壊を経て、新たな現代的位相に到達したのである。

確認申請を経る必要のない改修であることも、こうした豊かな空間形成に寄与している。なにしろ建築基準法に照らせばおおかたの京町家や長屋は違法建築となってしまう。法に則して建て替えれば、路地や木造などの京都らしさは大幅に損なわれる可能性が高い。行政もいろいろと苦労がある。京都にとってめざすべき建築のあり方は、そして京都ならではの建築とはどのようなものか。ともあれ審査員3人はこの二作を大いに評価した。

「西陣の立体町家」は新築だ。建築基準法のみならず美観地区の規制もクリアせねばならない。駐車場のような美観地区にとっての異物も組み込まねばならない。ここでこれまでの「水平町家」でなく「立体町家」として、つまり平面的な坪庭などの配置でなく、立体的な空間構成、床のレベル差や開口の開け方によって、光や風を取り込む手法が選びとられた。冷暖房のシステムも含めて、建築への誠実なアプローチが見られた。

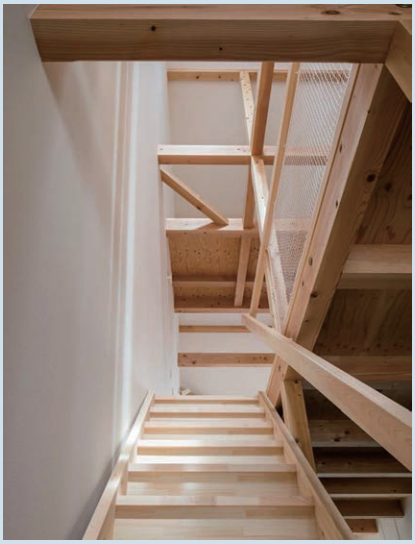
こうした都市の真只中の、困難なコンテクストに比べると、京都御苑に配された三つの休憩施設は実に恵まれた自然環境の中にある。それだけに、本質的な贅を凝らした、しかもそれをさりげなく示し、決してこれ見よがしにするような野暮な佇まいとならぬよう、しかも日本建築の原理的な構成に則して、鋼製建具の納まりも含め現代の建築として爽やかな木造建築にまとめあげるような、そんな工夫がなされている。伝統への媚もない。爽やかな風の吹き抜けるような建築である。「抜け」や「透け」という言葉が設計時に交わされたと聞く。

今回はさりげなくささやかな、しかし珠玉の作品が受賞作となった。ただ例年の作品群と比較して、あえて最優秀作はなし、とした。

西陣の立体町家

優秀賞

設計者：小林広英・伊庭千恵美／京都大学、鳥居厚志／㈱アトリエ九間 一級建築士事務所
桝田洋子／㈲桃李舎



【講評】

妙蓮寺前の寺之内通に面するこの住宅は、歴史遺産型美観地区の界わい景観整備地区にかかっている。すなわち、切妻平入の3～4・5寸勾配の日本瓦あるいは銅板葺きの屋根を有し、道路に対して特定勾配の軒庇をつけ、道路に面して駐車場を設ける場合は門を作らなければならない。こうした規制に則りつつ、設計者は家族6人の、つまり両親と男の子4人のための、新しい生活の器を生み出した。

特筆すべきことの一つは、その空気環境である。暖房は主として玄関の半ば床下に埋もれた冬期用空調機一台（暖房能力5・3kW、冷房能力4kW）。冷房もまた主としてほぼ一室空間の住居最上部も設けられた夏期用空調機一台（冷房能力4kW、暖房能力5kW）。これだけでまかなわれているということだ。暖気は一階床下のチャンバーや、微妙にレベル差をつけた二階の床の隙間を通って動き、上昇していって全体に行き渡る。冷気は頂部から徐々に降りてきて空間全体に満ちる。床下と壁と屋根と開口部の十分な断熱によって、内部空間は外部からしっかりと守られている。

一室空間とするための工夫の一つである床のレベル差は、視線の抜けや、あるいは天空や妻面から降り注ぐ光を通すための空間装置としても見事な効果をあげている。春や秋の自然通風をも考慮するなら、いわば光と風を物理的にも心理的にも透過させ、空間に祝福をもたらす仕組みなのである。

「立体町家」とは不思議な命名であると思ったが、こうした工夫を体験してみるなら、それがなかなか良い命名であることがわかる。都市の密集環境に空白を穿つ装置としての坪庭がいわば水平的な開放感を与える工夫だとするなら、まさしく立体的な開放感を与える工夫として、レベルに微妙な差を持つ床や多様な開口部が存在していることがわかる。

建築物は物理的な実体だが、空間は光や風が透過して初めて出現する心理的な現象だ。建築物は固定的な物であり、空間は流れる出来事だ。設計者は物の配列を通して空間を見ている。空間は直接作ることはできない。物の配列を通して誘導するのみ。建築の設計は物の加工を通してそうした喜びと驚きに満ちた現象を期待し続ける行為である。

壁を数多く置くのでなく、むしろ梁や筋交いなどを効果的に配して短辺方向の力を受け止めているのも、光や風に満ちる空間を生み出すのにおおいに役立っている。（竹山　聖）

所在地／京都市上京区
用　途／専用住宅
竣　工／2022年8月
敷地面積／102.01㎡
建築面積／　55.27㎡
延床面積／　94.71㎡
構造規模／木造2階建て

写真撮影／衣笠名津美

京都御苑の三つの休憩施設

優秀賞

設計者：香山壽夫・下川太一・鈴木隆史・梅野　勇／香山建築研究所

近衛邸跡休憩所 外観

【講評】

京都御苑の情報館へは昨年も京都建築賞を審査するさいにたちよった。審査員一同でいっしょにおとずれている。建築として値踏みするためではない。審査対象となるいくつかの建築を見てまわる、その合い間に足をはこんだまでである。ありていに言えば、手洗いなどもふくむ休憩をとるために。

御苑の情報館などは、まだこの賞にエントリーしていなかった。審査をすべき建物ではなかったのである。ただ、一同のあいだには、期せずしてこれを評価する声がおこった。品良くまとまっている。京都賞に応募していないのは、残念だ。すっきりした、いい建物なのに、などなどと。

その情報館が、今年は京都賞の候補として登録された。同時にたてられた近衛邸跡や清和院の休憩所ともども、審査の場へあらわれている。

あらためて現地へでかけ考えた。立地は京都御苑である。建築家が気ままに造形の奇をきそえる場所ではない。表現には、さまざまな箍がはめられる。市中にたてられる建築とくらべれば、制限も多かろう。そんなエリアで、建築家には何ができるのか、と。

京都御苑の三施設は、みな同じ構成をもっている。2・7メートルスパンの柱割、4寸勾配の入母屋舎、外周をとりまく廂は3寸勾配。この同じ原理で、たてられた。この制限の多い敷地で、自由をもとめ悪あがきをするのではない。逆である。自らに、さらなる規律をほどこし、そのなかで表現をさぐる手にうってでた。

同じ構成原理でつらぬかれていると言っても、3棟に違いはある。そのささやかな差異が、3棟を見くらべるとよくわかる。同じプリンシプルでできているだけに、こまやかな差異がきわだつ。規律のすきまにうかぶ多様性が、ここではあじわえた。

手法は古典主義建築のそれにつうじあう。たとえば、パラディアンスタイルの建築にも、個性はある。建築通はその差を賞翫する。同

上：京都御苑情報館 内観
中：近衛邸跡休憩所 内観
下：清和院休憩所 内観

所在地／京都市上京区
用　途／御所休憩所
竣　工／2022年3月
敷地面積／651,078㎡（京都御苑全体）
3,407.88㎡（京都御苑情報館）、40,487.36㎡（近衛邸跡休憩所）
9,263.76㎡（清和院休憩所）
建築面積／155.68㎡（京都御苑情報館）、185.92㎡（近衛邸跡休憩所）
324.97㎡（清和院休憩所）
延床面積／149.04㎡（京都御苑情報館）、176.85㎡（近衛邸跡休憩所）
307.07㎡（清和院休憩所）
構造規模／木造平屋建て

写真撮影／小川重雄

じ鑑賞の可能性が、ここにはある。百花繚乱たりうる現代建築に、あえて慎みをたもたせた点は多としたい。

ぱっと見は、モダンな和風ということになろうか。しかし床はすべて土間である。板の間や畳のスペース、つまり床を上げたところはない。靴をぬぐことのない、つまりは現代の公共建築である。そんな建物が、水平方向への視線に、けっこう気をつかっている。全体を土間としてしまった空間に、高床の気配を可能なかぎりとりもどそうとする。そんな苦闘の様子が、壁面のしつらいなどに見てとれた。

静謐感のただよう建築だが、けっこうたたかっている。そこにも魅力をいだき、高く評価をしたいである。

（井上章一）

2／5

優秀賞

設計者：柳室　純／一級建築士事務所 柳室純構造設計、奥谷みわ子／㈱奥谷繁礼建築研究所
服部さおり・服部大祐／ Schenk Hattori、甲斐貴大／ Studio arche

【講評】

小さな門を潜った先の路地奥に位置する長屋群5軒のうち、右奥2軒を使った改修であった。構造家の自邸であるこの住宅が面白いのは設計プロセスにもある。構造は当然ながら施主が担当しているが、他に何組かの設計事務所が本体、ファサード、家具、左官、と役割分担をしながら共同で設計をしている。そのためか色々な思いがすでに混ざり合っていて、今後の変化にも耐えうる良い塩梅のおおらかさがあった。

奥行き3ｍの細長い空間は路地に対して最大限開くために、奥行き1ｍの袖壁で支えるというシンプルな構造システムによって、さらに隣り合う空間の奥行き方向の間仕切りを最大限開く工夫がなされている。開かれた路地に面するファサードはツインカーボの中空部分に縦桟の入ったとても軽やかな建具によって遮られ、昔の剥き出しの土壁と新しくできたファサード後ろの半外部的な空間は魅力的な余白となり室内環境を守っている。ツインカーボの独特な揺らぎは景色として路地と内部をやわらかく分けている。このファサードを開け放つと向かい側の長屋の瓦屋根が広がりなんとも気持ちの良い広がりを感じる。路地を空間としても景観としてもうまく取り込んでいる。1Ｆの一番奥のバスルームはツインカーボの建具を開けば外部に面した露天風呂に、キッチンのカウンターは建具を開くとオープンカウンターとなっており、路地を挟んで向かい側には共有の水場がありそこに小さなテーブルと椅子が並べられ、コーヒースタンドやバーにもなりそうな雰囲気である。プライベート感が高く、小さな神様にも見守られているこの特徴的な路地は子供にとっては恰好の遊び場だろう。昔、こんな路地で暗くなるまで遊んだような記憶が蘇る。どこかノスタルジックな記憶と接続されるのは

私だけだろうか。こんなところに住んだらどんなに楽しいだろうかと思いを馳せてしまうほど魅力的な場所だった。（永山祐子）

所在地／京都市下京区
用　途／専用住宅
竣　工／2021年3月
敷地面積／34.9㎡
建築面積／34.9㎡
延床面積／67.6㎡
構造規模／2階建て

写真撮影／Shinkenchiku-sha

Row House in Nishinotoin

奨励賞

設計者：服部大祐・服部さおり／Schenk Hattori、甲斐貴大／Studio arche
柳室　純／一級建築士事務所 柳室純構造設計

所在地／京都市下京区
用　途／事務所＋ギャラリー
竣　工／2022年3月
敷地面積／ 82.57㎡
建築面積／ 80.06㎡
延床面積／105.78㎡
構造規模／木造２階建て

写真撮影／玉村広雅

【講評】

京都旧市街の路地に面した三軒長屋の両側２軒の改修プロジェクトである。右端はギャラリー、左端は今回設計を担当した設計事務所のオフィスとして使われている。

応募資料の中で最初に目を引いたのはギャラリー空間のシルバーに塗装された静かな光をたたえる２層吹き抜けの四角い空間だった。一般的に長屋は光が潤沢に入る条件の場所は少ない。その中で外から入るささやかな光をとても有効に使って魅惑的な空間を作り出していた。この吹き抜け空間に対して大きな階段状の空間ができており、それぞれの高さからこの光の空間と対峙する。土の露出する土間、手すりもなく、梁に掛け渡された薄い床。一度伽藍堂になった長屋の中にできた自由な空間に静かな光がじんわりと充満していた。立体、平面、どんな作品をおいても映える、美術作品と対峙する場所として素晴らしい空間であった。

もう一方の右側の設計事務所。入ると通り土間、左側に３５０㎜の高さの基礎梁が残され、中央の広間のみ床を張らずに土間が残され土の間となっている。この空間はこの長屋の中心的な場所となっており２階に吹き抜け２階の室からも見下ろせる。３５０㎜の高さはちょうど座り心地の良い高さで、時に広間を囲んで人が集まるシーンを想像した。コンパクトにまとまった各所室はヒューマンスケールの空間でちょうど良い光の入る心地よい場所だった。外に面したトイレも細い光の入る美しい場所だった。

長屋の特性、スケール、マテリアル、光など丁寧に拾い上げ、おおらかでありながら緻密な設計は、ここにしかない魅力的な長屋改修の解を導き出していた。

（永山祐子）

第11回 京都建築賞
藤井厚二賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞

2／5

設計者 柳室 純（一級建築士事務所 柳室純構造設計）、奥谷みわ子（㈱奥谷繁礼建築研究所）
服部さおり・服部大祐（Schenk Hattori）、甲斐貴大（Studio arche）

現地審査選出作品

北白川のフラット

設計者 小笹 泉・奥村直子（IN STUDIO）

領域の家

設計者 小笹 泉・奥村直子（IN STUDIO）

西陣の立体町家

設計者 小林広英・伊庭千恵美（京都大学）、鳥居厚志（㈱アトリエ九間 一級建築士事務所）
桝田洋子（㈲桃李舎）

Row House in Nishinotoin

設計者 服部大祐・服部さおり（Schenk Hattori）、甲斐貴大（Studio arche）
柳室 純（一級建築士事務所 柳室純構造設計）

［審査委員］長坂 大（京都工芸繊維大学 教授）
平塚 桂（ぽむ企画 編集・ライター）
村越 怜（analogue）

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回のテーマ「嗣ぐ」には、15作品の応募があり、3月7日の書類審査により現地審査対象の5作品を選出。3月29日に現地審査を行い、慎重な議論の結果「2／5」が藤井厚二賞に選出されました。

2023年 藤井厚二賞 講評（審査経過）

長坂 大

今年の応募作品は15作品であった。書類審査により現地審査対象作品を5つに絞って現地審査を行い、その後再度テーブルを囲んで議論を重ねた結果「2／5」を最優秀の藤井厚二賞とすることにした。現地審査対象作品はどれも優れたアイデアのもとに設計されていて、選抜にはそれなりの時間を必要とした。以下、訪問順にコメントさせていただくことにする。

北白川のフラット

改修前の平面構成を唯一乱していたキッチン周りを撤去して、西側の「御陵」緑地に向かって部屋が平行に並ぶスッキリとした平面を完成させた作品である。一番奥の部屋を細長い畳の部屋にしたのがユニークで、一貫した平面構成の方針が感じられる。押出し成形セメント板のダイニングテーブルの重量感も、この構成の表現に一役買っていると思う。施主でもある設計者自身がつくった大量のラワン合板の家具は暗色に塗装され、「いかにもDIY」にならないようにまとめられていて好感が持てた。

「嗣ぐ」というテーマが影響しているのか、シンプルに時代あるいは地域の状況ゆえなのか、改修物件の応募が多かった。現地審査対象となった建物も、5件中3件がリノベーションだ。しかしリノベーションであっても建物そのものを「嗣ぐ」かどうかだけではなく、土地をいかに嗣ぎ、将来的に界隈にいかに資するのかというところも検討すべきだろう。その建設行為が一帯にどんな変容をもたらすのか。そのあたりを考えながらめぐった。

領域の家

一帯を親族が所有する土地群の中の計画で、南北にゆったりとした庭を持つ独立住宅である。南側の回廊とそれにつながる土間空間が、独自の積極的な提案となっている。欲をいうなら、土の庭と回廊との関係について、もう一歩踏み込んだ「何か」があればよかったのではないかと感じた。北側の井戸跡を残して庭の一部としているあたりは歴史的要素の現代的な扱い方として好感が持てる。その北側の庭に面したカウンターと階段が一体的な構造と造形でまとめられているあたりには、作者の力量を感じることができた。

西陣の立体町家

スキップフロアでつながる上下空間が特徴的な家である。この間口で4人の子供たちの個室を平凡に確保しようとすれば、暗い廊下と採光の乏しい個室が並ぶプランになっていただろう。全体をひとつながりの空間として扱うことで、光と風が行き交う豊かな家族空間として実現しているところが素晴らしい。温度調整装置としてもこのワンルーム空間は各所工夫されている。あえていうなら、建築の詳細、細部造形に関する探求がもう少し欲しい気がする。

Row House in Nishinotoin

ひとつ隔てた二つの長屋をオフィス、イベントスペースに改修した作品である。床や建具を取り除くことで、区切られていた空間に新しい広がりを与えることはもちろん、そこにもっと別のイメージを与えようという試みである。伝統的な素材や言語の使用にとどまらず、銀色に塗られた壁や大きな階段状のボックスなどを採用し、その明暗や新旧の対比を通して、長屋の未来を探求しようという積極的な気概を感じることができる。

2／5

同じく長屋のリノベーションである。こちらは住宅としての機能は変わらない。路地が途中でクランクしていることに加えて内部空間の有効寸法が厳しいことが、結果的にこの居住空間に強い個性を与えている。路地の南側にも住み手の生活領域があるところも特徴的で、そこが平家であるために北側本体にとって一定の視界の広がりを確保できている。ポリカーボネードの建具は、これらをよく見越して選択されているように見え、細長い空間群をひとつの建築として軽やかに統合している。この素材がもたらす光は、これらに現代的で幸福なイメージを施しているように感じた。（真夏にはそれなりに暑いであろうと推測するが。）将来、一番奥の棟を取り込むことができれば、住まいとしての独立性は増し、その効果はさらに増すだろう。様々な厳しい条件を抱えた特異解のようで、「長屋というもの」一般に新しい可能性を感じさせてくれる作品であったように思う。

建築の革新性は、言葉で簡素に説明できることが理想かもしれないが、実現した空間が言葉より雄弁に語る場合もある。リノベーションやコンバージョンの場合、その実現した空間に「新旧」それぞれの時代が関与しており、革新性の解釈は一段と難しく、また興味深いものとなるように思う。

界隈を嗣ぐという意味で最も感心させられたのが【2／5】だ。路地奥の町家改修というのは京都市内ではありふれた条件だ。しかしここでは半透明のファサードが設らえられ、キッチンなどを路地に開くように改修がなされ、占有空間と共用空間の境界が薄められていた。さらに周辺の町家群を所有するオーナーとも相談の上、路地や水場などの界隈の共有エリアを再生しているのも面白い。構造システムも既存躯体を継承しながら強化する方針を持ち、将来や界隈に好影響をもたらしそうだ。私有と共有が絡み合う京都の路地奥の性質を知り尽くした上で、周辺および未来への波及効果をさまざまな面から検討がなされて生まれた建物だと感じた。

また環境工学に先駆的に取り組んだ藤井厚二の名を冠する賞だけに、環境性能の担保は無視できない要素だと思われる。**【西陣の立体町家】**はそこにアプローチし効果を上げている事例で、温湿度にわずかなムラや時間的変化が見られるだけの安定した数字が資料に示されていた。かつ敷地は非常に細長い。京都の田の字地区内の、建物の形や色に厳しい規制のかかるエリアにある。住人は6人の大家族。こうした厳しい条件を踏まえつつ、環境性能に加え、計画、意匠、構造、コスト等さまざまな条件がバランスよく満たしている。京都市内の狭小地を嗣ぐ上でのひとつの最適解だろう。ただし着実である分、藤井厚二的な実験性には欠けていたのかもしれない。

【北白川のフラット】はマンションの一室

平塚 桂

のリノベーションだ。ありふれた条件だが、アプローチが新鮮だった。〝躯体に負けない素材〟として押出成形セメント板を選び、その素材を用いた什器のデザインを軸に空間を構成していくという方法だ。あえてキッチンや窓辺の棚の天板という副次的な部分を核に改修しているのもいい。それによって壁式コンクリート構造がもたらす形式を弱め、周辺の風景も取り込みながら、場の重心や風景を変容させていた。ただし集合住宅の限界かもしれないが室内環境に資する改修として完結していたように思えたのが、先の議論へと進まなかった理由かもしれない。

【領域の家】は既存家屋を2棟解体し、建物1棟と庭や外構を新設するプロジェクトだ。親族で住み継がれてきた一帯の離散性や領域性の継承を目指すため、ただ建て替えるだけでなく、さまざまな要素同士の均衡状態をもたらすよう盛土、庭、土間、床と場を段階的に変化させるという場のつくり方に共感した。ただし実際に訪ねてみると、想像よりも、内外の動線の自由度や視覚的なつながりに少し不自由さが感じられた。

【House in Nishinotoin】は**【2／5】**と同じく路地奥町家の改修事例だ。タテ方向の抜けや塗装によってもたらされる視覚的な効果はよく理解できたが、界隈との関係が明確には見えにくく、さまざまな要素が界隈へと滲み出ている**【2／5】**に軍配を挙げた。

【2／5】はほとんど満場一致で藤井厚二賞に選ばれたように記憶している。しかしそれは本作の計画の魅力、都市的、時間的な視点を踏まえた批評性の高さゆえであり、それ以外の建物にも驚き、感心するところが多々あった。いずれにも成熟した都市部の限られた、さまざまな制約のかかる場所において、いかに冗長性（じょうちょうせい）の高い場を生み出すかという工夫が、それぞれの視点で凝らされていたからだ。

村越　怜

審査当日は天気が晴れで、気温も暖かであった。現地審査に選ばれた作品はいずれも京都市内でそう遠くない位置にあり、規模としては全てが住宅程度のもので、床面積に大きな差はなかったが、その中でもそれぞれが、新築の場合敷地の大きさや間口・奥行の比率、改修の場合既存のビルディングタイプや接道条件によってかなり異なるプロジェクトになっていることに驚いた。

北白川のフラット

集合住宅のアプローチを経て玄関から入り奥のテーブルの間へと至ると、まず水平面、高さの計画が優れていると感じられた。物質の密度や固さなど物理的な面と、建具の再利用や既存躯体の現しによる時間的な面を取り入れて、それらの集合体として建築が現れている。集合住宅の1室の改修でありながら、資料において配置図を記載したり、周辺の山を描くことで遠くまで視野に入っていることが分かる。ローコストながら、細部・全体の往復による丁寧な設計やマテリアルと対峙することによる、つくることの楽しさが感じられた。

領域の家

大きな庭がある南側だけでなく、北側にも庭を確保し、浮いた土間によってそれらをつなぐという、北側にも重きを置いた計画が、生活を豊かにするように思う。土間だけでなく、天井や建具、屋根勾配からも外観を含め、断面を密に計画したことが伺えた。既存建物（又は庭）にあったモノの位置を変えることで、外構をつくっており、新しい住宅が土地へ馴染むようになっている。

西陣の立体町家

前面道路に対して、1階では道路付近の屋根をかけた門、玄関扉より一間手前にある簾、玄関のガラス框戸というように細長い敷地形状を活かして段階的に距離感を調整する工夫をして、シークエンス的には最も奥にあたる2階の居室2の南側の方が道路がより近く感じるのが印象的であった。本賞にとって重要な、温熱環境に対する考えが明快に示されており、床の段差が効果的であることがよくわかる。

Row House in Nishinotoin

［アトリエ］棟において、決して広くはない床面積の多くの部分を土床の広間としている。その存在は大きく、ふかふかした踏み心地で、温熱環境的には冬場は外部に近いのではないかと思われ、そのような室を中央に大きな面積を割いて配置することは、合理性や温熱環境評価の一般的な快適性とは異なるものを求めた実験的な試みだ。そのような異物を取り入れた計画がどのように作用するのか、あるいは使いこなされていくのだろうか。設計された2軒は同じ長屋の並びである。もとの断面はその2軒で異なるが、一方は室として仕切りながら少人数の集まりが集合したものであり、もう一方は大きな気積の中に大人数が集まるような使い方が想像でき、改修のバリエーションを提示する試みとして見ることができた。

2／5

建具は室内・路地を明るくするとともに室内外を一体的にできるようにし、構造は大胆なスチール壁による提案と、既存建物の土壁や構造材を残しながらしっかりと補強をする細やかさがあると感じた。主にLDKとして使われる1階に、一体的となりつつレイヤー感を生んでいる路地と平屋建ての別棟が生む、中庭のような外が差し込まれることで豊かな体験となっている。2階は周辺から適度に距離があるため視界が開けており、1階と2階にそれぞれ良さがあることも魅力的である。見学後の議論でも話題にあがったが、この場所における大胆なファサードの計画が功を奏しており、面積が大きいため場所の質を決定づける上で重要な役割を担う建具において、通常の框戸の作り方を疑い、鏡板の面を厚くして框の木材を細くするという考えで、ポリカーボネート複層板の面積を広くするための作り方の提案がなされている。

前述のようにそれぞれの作品に積極的に評価できる点がいくつもあった。構造、環境性能、床・壁、建具などの設計の要所と、路地奥の空間を明るくしよう、路地と一体的な室内にしよう、というこの場所と建物がどのように存続していくか（させたいか）という意思がはっきりしているように思え、**【2／5】**に藤井厚二賞を差し上げるという結論に議論を経て至った。「嗣ぐ」というテーマに対して、京都の街に多く残るであろう路地に面する長屋を、壁を抜くことで現代的に住みやすい室の面積を確保し、占有化していくことで路地空間の風通りを良くするという改変は、このような遺産を延命させる、あるいは都市における住まい方の、戦略のひとつとして説得力がある。

2／5

藤井厚二賞

設計者：柳室　純／一級建築士事務所 柳室純構造設計、奥谷みわ子／㈱奥谷繁礼建築研究所
服部さおり・服部大祐／Schenk Hattori、甲斐貴大／Studio arche

現地審査選出作品

北白川のフラット

設計者：小笹　泉・奥村直子／ IN STUDIO

所在地／京都市左京区
用　途／共同住宅（改修）
竣　工／2020年7月
敷地面積／1407.12㎡
建築面積／　792.00㎡
延床面積／2219.14㎡（当該住戸約80㎡）
構造規模／鉄筋コンクリート壁式構造
3階建て（当該住戸2階）

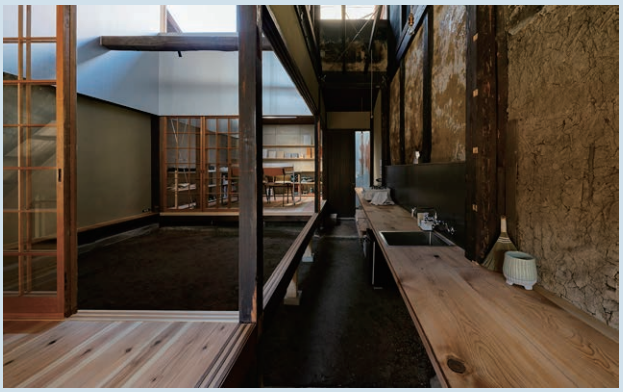
写真撮影／白谷　賢

領域の家

設計者：小笹　泉・奥村直子／ IN STUDIO

所在地／京都市左京区
用　途／戸建住宅
竣　工／2020年5月
敷地面積／非公開
建築面積／84.85㎡
延床面積／95.43㎡
構造規模／在来木造2階建て

写真撮影／吉田　誠

西陣の立体町家

Row House in Nishinotoin